ハヤカワ文庫〈JA 32〉

多聞寺討伐

光瀬　龍

早川書房

著者略歴　昭和28年東京教育大学理学部卒業後哲学科に学ぶ　SF作家　主著書「喪われた都市の記録」「たそがれに還る」「百億の昼と千億の夜」「寛永無明剣」「カナン5100年」他多数あり

多聞寺討伐

〈JA32〉

昭和四十九年六月十日　印刷
昭和四十九年六月十五日　発行

（定価はカバーに表示してあります）

著者　光瀬龍
発行者　早川清
印刷者　東儀俊邦
発行所　株式会社　早川書房
郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京（二五四）一五五一～八
振替番号　東京・四七七九九番

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします

印刷・誠友印刷株式会社　製本・株式会社明光社

ノ文庫JA
〈JA32〉

多聞寺討伐

光瀬　龍

目次

追う……七
弘安四年……四五
雑司ヶ谷めくらまし……七九
餌鳥夜草子……一一五
多聞寺討伐……一五七
あとがきにかえて……二三七

装幀・挿絵　石井三春

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

多聞寺討伐

追

う

文化七年庚午の七月廿日の夜、浅草南馬道竹門のほとりへ、天上より廿五六歳の男、下帯せず赤裸にて降りて来りてたたずみゐたり。町内の若きもの、銭湯よりかへるさ、これを見ていたく驚き、立ち去らんとせしほどに、かの降りたる男はその儘そこへ倒れけり。かくて件のありさまを町役人等に告げしらせしかば、皆いそがはしく来て見るに、そのものは死せるがごとし。やがて番屋へ舁ぎ入れて介抱しつつ、くすしを招きて見せけるに、脈は異なることもあらねど、いたく疲れたりと見ゆるに、しばらくやすらはせをくこそよからめといへば、みなうち守りてをるほどに、しばしありて、件の男は醒めて、かうべを擡げにければ、人みなかたへにうち集ひて、ことのやうを尋ねるに、答へていはく、某は京都油小路二条上る町にて、安井御門跡の家来伊藤内膳が伴にて安次郎といふものなり、先づここはいづくぞと問ふ。ここは江戸にて、浅草といふ処ぞと答ふるに、うち驚きて頻りに涙を流しけり、かくてなほつぶさに尋ぬるに、当日十八日の朝四つ時ごろ、嘉右衛門

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

といふものと同じく、家僕庄兵衛といふものをぐして、愛宕山へ参詣しけるに、いたく暑き日なりければ、衣を脱ぎて涼みたり。その時のきるものは、花色染の四つ花菱の紋つけたる帷子に黒き絽の羽織、大小の刀を帯びたりき。しかるにその時、一人の老僧わがほとりへいで来て、面白きもの見せんに、とくに来よかしといはれしかば、随ひきぬとおぼえしのみ。その後のことをしらずといふ。いともあやしきことなれば、そのもののはきたる足袋（白木綿の足袋なり）を、あたり近き足袋あき人等に見せて、こは京の足袋なりやとたづねしに、京都の仕入に違ひなしといへり。その足袋にすこしも泥土のつかでありけるもまたいぶかしきことなりき。江戸にてはかかる事あれば、官府へ訴へ奉るが町法なれば、何と御沙汰あるべきか、その事も計りがたし。江戸に知音のものなどのありもやするとたづねしに、しる人とては絶えてなし、ともかくも掟のまにまにはからひ給はれといふにより、町役人等談合して、身の皮を拵へつかはし、官府へ訴へまうししかば、当書御吟味の中、浅草溜へ御預けになりしとぞ。その後のことをしらず。いかがなりけんかし。

滝沢馬琴

兎園小説より

1

十日ぶりに頭に巻いた包帯をほどくと、傷ふさぎの仕上げ薬を練りのべた半紙が、もうすっかり乾いて落葉のようにかさかさとたたみの上に落ちた。医師の言いつけを守ってしばらくの間、結んだままにしておいたので、包帯にしめつけられていた頭髪は、汗にむれて白っぽい塩気をふいていた。

「頭、くせえだろう。およし、髪洗ってくれねえか」

せまい庭のすみの八つ手の葉が夕風にゆれていた。ぬれえんに立って衿元を大きくくつろげ、風をふところに入れながら徳二郎は座敷へ言った。

「髪かえ」

台所から女房のおよしが姿をあらわした。

「湯屋へ行っちゃどうなのかね。おまえさん」

「そいつはまだよくねえらしいよ。柳庵先生が言っていたが、酒や風呂は頭に血が登るから当分の間、さしひかえたがよいとさ」

「なんだか暑苦しそうでいけないね。それじゃ、今、湯をわかすから待っていておくれなね」

およしが台所へひっこんでいったかと思うと、水がめの水をひしゃくで鍋にうつす水音が聞えてきた。

「そうだ。久しぶりに髪洗ってさっぱりしたところで西田の旦那に顔出ししてこよう」

「なんか、言ったかえ」

およしがへっついの前からふりかえった。

徳二郎はそれにはこたえず、ふくらはぎにとまった蚊をてのひらでたたきつけた。

暑い夏の日に、熱い湯で洗うのも、いっそさっぱりして気もちがよかった。

「もうすっかり傷口もふさがって赤味がとれたよ、五針もぬったあの傷がよくもこんなに早くなおったものだねえ」

およしは熱い湯で赤くなった指先で手ぬぐいをしぼり、それで徳二郎の汚れた頭髪をしごいた。それでなくてさえ西日をいっぱいに受ける縁先で、およしのほうもうなじも、少しはだかった胸元も汗でしとどに濡れていた。徳二郎の前の小さなたらいのむこう側の、およしのすそ前がわれて丸いひざの上までのぞいていた。

「まったくあのときはおれはもうだめかと思ったぜ。釜仙のやつぁ脇差をふりまわしゃがるし、子分どもは匕首をかまえてぐるりとかこみやがる。西田の旦那の来ようがもうちょっとおそかったら、おれは今ごろ墓の下よ」

「えんぎでもない。およしよ」

千住から三の輪、さらにはこの車坂から上野、神田、赤羽橋へんにまで出没し、お上の手をくぐりぬけて荒しまわった強盗(だしこ)の釜仙一味の逮捕に向った徳二郎をはじめとするところの目明し数名が、逆に釜仙一味の待ち伏せを受け、三名の手負いを出し、そのうちの一名が四、五日後に息を引きとるという不首尾を演じてからもうひと月ほどになっていた。徳二郎は頭部にひどい刀傷を負い、外科の柳庵も首をかしげるほどの容態だったが、さいわい破傷風もおこさずにもとの体

にかえれたようであった。

「まだちょっとこう頭のしんが痛えけれどももう大丈夫だ。おめえにもえらいやっかいをかけたぜ」

「なに言ってるのさ」

徳二郎の手がおよしのひざの間にのびた。

「あれ、おまえさん」

「おめえは目明しの女房にはもったいねえとよ。なかまはみんな言っているよう」

およしの体は汗だけでなく濡れてきた。

髪を洗い行水を使った徳二郎は、早目に夕飯を食うと家を出た。

徳二郎が付いている八丁堀同心の西田茂十は上野不忍池に近い池の端七軒町に住んでいた。もちろん町奉行所与力配下の同心としての長屋は八丁堀にある。しかし上野、浅草常(じょう)見回りとして八丁堀から出張ってくるのもなかなかたいへんなことだ。寛永や寛文の頃ならいざしらず、文化、文政のこの頃では与力、同心といえども遠い自宅から出張ってくるようなことはしない。西田同心にも世話する人があって端唄の師匠に家を一軒持たせた。徳二郎たち、西田同心についている目明し連もしぜん、池の端七軒町へ足が向くことになる。西田の奥様はことのほかの荒れようということで八丁堀へはいよいよ足が遠のいた。

裏木戸から声をかけて庭へまわった。徳二郎の家の庭とたいしてちがわないせまい庭に西田茂十が立っていた。不忍池を正面に受けると、まだ薄明りの残る池のおもてを埋める蓮の葉がいっせいに白い葉裏をひるがえした。やがて生きかえるような涼しい風がこの庭をも吹きぬけていった。

「徳二郎か。頭の傷はどうだ。もう包帯をとってよいのか」

徳二郎は小腰をかがめた。

「お上のご用繁多なおり、長くやすませていただきやした。おかげさんで今日から包帯もとれ、久しぶりに髪なぞ洗いやした」

「それはよかった。あがれ、あがれ」

酒好きの西田同心は奥からあらわれた妾のお秀にさっそく酒の用意を言いつけた。徳二郎が頭の傷には酒がよくないことを言うと、西田はめしたきの老婆にまんじゅうを買いに走らせた。

「秀、ここへきて酌をせ」

妾のお秀は姿の佳い女だった。

「……すると、その安次郎という男はいってえ、どんなふうに落ちてきたんで？　天から石みてえに落ちてきたのか、それとも、こう、ひらひらと降ってきたものか、そこのところはどうなんでやんしょう」

西田同心は干魚を二つに引き裂きながら、

「それがはっきりせんのだ。急に道にあらわれた、という者もあるし、はじめはぼんやりと薄かったのがしだいに濃くなってさいごにはっきりと人の形になったという者もあるのだ」
「高い天から石のように落ちてきたのでは生きていられるはずがねえ。旦那、それはきっとゆっくりと、ふわふわ落ちてきたにちげえねえ」
西田同心はからになった盃をお秀にさし出した。
「徳二郎。それはちがうぜ。どうして羽のねえ人間がふわふわと降りてこられる？」
「そりゃま、そうですが」
「そうだろう。ところがそうでないとすれば石のように落ちてきたとしか考えられねえ。町のやつらぁ、天狗さまのしわざだとか、神かくしがほうり出したのだとか、いろいろに言っているようだが、江戸の町中でまさか天狗さまでもあるめえ。徳二郎、おまえ、どう思う。このこと」
徳二郎はまんじゅうを二つに割り、その手をひざに置いたまま首をかしげた。
「京都の安井御門跡のご家来衆お身内とありゃ、これはもののけとはちがう。そんな消えたりあらわれたりとはちと解せねえ。旦那、旦那は神通力みてえなものは信じますかえ」
「手妻のようなものでは何回も見てるがな。それとて術であろう。ひっきょう人間のおこなうわざよ。不思議というか神技というかそのようなものはまだ見たことがねえ」
西田同心のかたわらのお秀が、言葉の切れるのを待って口を入れた。
「安次郎とやらいうその男は、ほんとうに安井御門跡のご家来の身内の方でいらっしゃるのでしょうねえ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton